

故 今井長太郎師といいぎり

池田 鉦七

樹木の個性美に酔い、此處を餌場に、峙にと群れ集い、飛び去り行く野鳥を愛する風情こそ、人生の醍醐味と云えよう。

北陸の冬は駆け足でやって来る。浪花の千切れ飛ぶ越前海岸は十里に延びる段丘に、数億本の野生水仙が、清楚な一重花をチラホラと芳香に匂わせ咲き初める頃、鉛色の垂れこめた厚雲が雪降しの初雷を伴い、越前、若狭に襲い来る。シベリアからの鷓鴣や赤腹、野鴨類が渡りを終えた頃である。

高樹の「いいぎり」は落葉の木肌を寒風に晒し、房なりの真紅な果粒は垂れ下り、人里離れた山中に誰かを待っている。「鳥をだ」「ななかまど」の赤さに優る「いいぎり」は一際目立ち、鳥達の好餌となる。

越前と若狭を分ける鉢伏山は南方系・北方系の植物相の分割と交錯地帯で対馬暖流とリマン海流との影響だと謂れている。嶺北には南方系、雌雄異株の「いいぎり」はなく、丹波、江州境の諸連峰にも見当たらない。

遠い昔、今上陛下に「若狭の植物」を、ご説明した郷土植物学者、今井長太郎師と余暇を裂き、谷川を遡り、山麓を分け入り「いいぎり」を探し尋ね、2人は期せずして、その虜になってしまった。気候、地質のためか北陸には「いいぎり」は少なく珍らしい。

昭和49年、秋、金澤鉄道局主催の現地見学にて埼玉の大宮を訪れた時、「フト」街路樹になり下った赤いものを見た。紅葉ではない。手の届かぬ上枝に真紅の房状の櫟種が垂れている。探し求め夢にまでみた「いいぎり」ではないか。鳥影が映った。石灰を撒きちらした様な鳥糞が樹幹のまわりに無造作に飛び散っている。無意識にチリ紙を取り出し、地面に這い鳥糞を掻き集めた。行きずりの人は、不審の眼を投げかけて去って行く。

鳥糞は鞆の底にねむり、敦賀へと530軒の長い旅路のあと会社の温室に囲われ、適量の水と20度の室温管理により、鳥体を通り抜けた「種子」は生命を息吹き、黒土より頭を擡げ始めたが、それは僅少な芽生えであった。どうしてあんな高木になるのか？ 或は他の種子ではないかと、何度か疑いをもった。丹精の甲斐あってか日、1日と成育は早められ、山陰の里雪が消える頃、大地に戻し「心」の通った保護のもと「スクスク」と若木となっていく。

今井師に分譲した鳥糞は直播したので発芽率は低かったが、多くの幼苗が得られた。2人は共に喜び、北陸の山、嶺を「いいぎり」で埋め、遠い大陸から波風を衡いで渡り来る野鳥の、こよない御馳走の食餌にと念願に燃え早速、敦賀市に開設された松島第4公園に、街の美化と鳥達への心やりを果たしたのは51年であった。今は益々成長し、私達の心願を叶えてくれることだろう。その赤い種実の結ぶのを待たずに、今井師は、今夏の暑い日、不帰の客となってしまった。

若狭の今井師宅に育てられた苗木は、師の遺志により嶺北の地足羽山に、小林館長の手により

移植せられた通報に接し、その遺徳を偲び、師なき面影を「いいぎり」により永劫迄、残されんことを切望する。

『後記』，「足羽山には誰が持ち運んだか、若木を見守る様に親木があり、今年も真赤な実が、今井師の冥福を祈るよう垂れ下っていたと。

(2) 「いいぎり」イイギリ科 *Idesia polycarpa* Maxim 落葉高木ゴ暖地の山林に生え、幹は直立、放射状に枝は広がり高さ十米に達する。5月頃、枝先に円すい花序をつけて垂れ下り、多数の帯緑黄色花を開く。径一握の実は熟すると赤くなり、内に小さな種子がある。昔、飯をこの葉で包んだので名づけられた。

(3) 「若狭」の「いいぎり」は藤井の伺陽寺谷臭に一木、耳川の上流、新庄関所跡に大木がある。

昭和53戊午歳 御走 除夜の鐘を聞きつつ記す。

(元日本ニッケル敦賀工場長)